



近江の平安彫像

—後期—

平安時代は、都が京都に移された延暦13年(794)から平氏が敗れ鎌倉幕府が実権を握ろうとする文治1年(1185)頃までの約400年間という長きにわたる時代であり、社会のあり方や宗教のかたちなどもかなり変化する。当然、仏像の表現も大きく変化することになるが、一般に、平安時代の彫刻史は大きく二分して考えられている。

最初は、既に佐々木進氏によって述べられた8世紀末から9世紀を通しての時期のもの—平安前期彫刻—で、一般に弘仁、貞観彫刻とよばれるものである。次に、11・12世紀の大半を通してみられるもの—平安後期彫刻—で、一般に藤原彫刻とよばれている。今回は、この平安後期彫刻について考えてみたい。

平安後期彫刻の世界とは、結論を先に述べれば、「定朝様」が日本列島に大流行した時代の彫刻史と考えられている。「定朝様」とは、仏師定朝によって完成された仏像の表し方と

言えるだろうが、定朝が制作したことが確実に分っているのは、天喜1年(1053)に供養された京都府宇治市にある平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像だけである。しかし、記録によると、仏師定朝は当時の政界の中樞を独占していた藤原摂関家とその周辺の貴族や大寺院の依頼に応じて、多くの仏像を制作している。そして、この定朝の作った仏像こそが、この後の約150年間にわたって、仏像を作るに際しての手本となり、忠実なまでにその姿が写しとられた。そのために、極めて個性の乏しい仏像が、^{よき}木造という新技法を用いて大量に生産されることとなる。この仏像群に共通してみられる作風を定朝様とよび、この時代を代表する様式と考えられている。

定朝様の作風とは、顔の丸い輪廓からはじまり、眠るが如くに優しい表情、丸くなだらかなカーブを描く肩から腕にかけての表現、ボリュームを強調せずに表される胸から腹に



釈迦如来及両脇侍坐像

大津市 常信寺

かけての張り、そして肉体をつつむ衣は、浅い衣文を丸く流れるように刻んでいる。また、四天王像などの、本来は恐ろしげな仏像も、激しさを抑えた優雅で静的な姿に表されている。

この、慈悲に満ちた、ある意味で貴族好みの仏像が、京都を中心にして大量に制作され全国的に流行することになるが、県内にもその優作が残っている。たとえば、甲賀町長福寺の阿弥陀如来坐像、安土町浄厳院の阿弥陀如来坐像、五個荘町石馬寺の阿弥陀如来坐像などがある。また、大津市南郊の大石富川町常信寺に伝わる釈迦三尊像は、制作時期が12世紀後半とやや新しくなるものの、京都の仏師が作った洗練された仏像である。

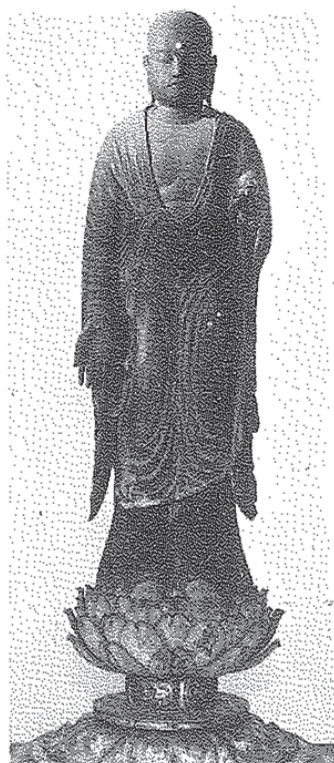
ところで、平安後期彫刻は、中国や朝鮮半島の仏像の影響を受けて成立したのではなく、平安前期彫刻が変化して成立したものであるということを確認しておく必要がある。それまでの日本の彫刻は、中国や朝鮮半島の影響によって変化し、新しい様式が成立したのである。しかし、この時代の彫刻は、前代の様式を継承しながら変化し、仏師康尚や定朝が当時の貴族の好みに合った仏像を制作し、新しい様式を完成させたのである。



仏頭
甲賀町 長福寺

そのため、新しい様式が完成するまでに長い時間がかかったのである。10世紀という約100年間が、新様式の完成に費やされた。

甲西町岩根に善水寺という寺がある。山腹に建つ国宝の本堂内には、所狭しと仏像が安置されている。その本尊薬師如来坐



地藏菩薩立像
水口町 永昌寺



聖観音立像
甲賀町 櫛野寺

像は、内刳（像の干割れを防ぐために、像内を刳って木心を取り除く技法）された像内に納められた紙片に正暦4年(993)の年紀がみえ、10世紀末に制作されたことが確実に分かる。また、堂内の梵天・帝釈天立像、不動明王坐像なども同時期の制作と考えられている。この善水寺より車で20分ほど走った水口町宇川の永昌寺の本尊地藏菩薩立像も、衣文の彫り方など極めて似たものであり、同じ作者あるいは工房の制作と考えられる。

永昌寺像について言えば、手先や足先を除いたほとんど全身をヒノキの一木から作り内刳しない。かなり厳しい表情をはじめとして、ボリュームを残した体つき、いささかくどく彫られた衣文線など古い作風を残すものの、肩も丸みを帯び、衣文線も鋭さを欠いた彫り方でくりかえす点など、平安後期彫刻への移行を表してはいる。当然のことながら、善水寺の諸像も同じ性格の下に制作されているのである。

993年前後と言え、康尚の活躍期にあたり、藤原彫刻の完成期に入りつつある。しか

し、善水寺諸像や永昌寺像の姿は、一木で作られているという点とともに、古い姿を残している。つまり、善水寺像等は、京都の仏像に対して、かなりの遅れをとっていることが見てとれるのである。この、京都中央と近江の彫刻との間にある様々な差こそが、近江における平安後期彫刻を複雑なものとする、ひとつの大きな原因なのである。

守山市矢島町の真光寺に伝わる聖観音坐像は、割剝造（一木から像の幹部を作り、概ねふたつに割って内剝し、再び合わせて作る技法）の像で、内剝された像内に墨書がある。それによれば、この像は長暦2年(1038)以前に制作されたことが分かる。ボリュームを残しながらも、衣文などはかなり丸みを帯びて浅く彫られており、藤原彫刻としてのかなりの完成度を見せている。

甲賀町長福寺に伝わる仏頭は、破損が激しいとはいえ、丸くふくよかな顔に切れ長の目や小ぶりの唇をバランスよく配置し、作者のなみなみならぬ力量を示している。その彫り方や作風は、京都市広隆寺に伝わる寛弘9年(1012)制作の千手観音坐像とよく似たものとも言われ、11世紀前半の優作である。

立像では、大津市下阪本の聖衆来迎寺客殿

に安置されている十一面観音立像が注目される。極めて丸く作られた顔、撫で肩から垂れる両腕のカーブ、腰にかけてのくびれ、裳の折り返しやスネの前の衣文など、いずれも流れるような曲線によって構成されており、そいだよな頬の肉取りや全体に平板な印象を与える点などに問題があるものの、11世紀中頃における優美な格調を保っている。

これら諸像は、いずれも洗練された作風のもので、京都中央の仏師やそれに近い作者の手になるものであろう。この種の像としては、延暦寺横川中堂本尊の聖観音立像、石山寺本尊の如意輪観音半跏像、石馬寺大威徳明王像、高月町向源寺の大日如来坐像なども注目すべき作品である。しかし、いずれも12世紀制作のものも多く、数量的にもそれほど多いとは言えない。

甲賀郡甲賀町にある櫛野寺は、この地域において最も注目すべき寺院のひとつである。と言うのも、本尊十一面観音坐像のように比較的洗練度の高い像と、像高1メートル前後の立像群のような洗練性を欠いた、一般に「地方仏」と呼ばれる種類の像とが併存しているからである。結論的に言えば、櫛野寺におけるこの併存現象は、平安後期の近江全体における彫刻史の縮図であると言える。

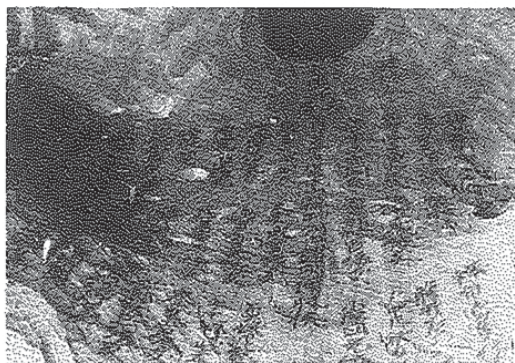
ところで、この立像群であるが、11世紀初期から12世紀を通して、同じ系統の仏師の作と推測される像が約12体



増長天立像
栗東町 金胎寺



阿弥陀如来坐像
湖東町 善明寺



阿弥陀如来坐像 像内墨書
湖東町 善明寺

ほど伝えられている。初期のものは、一木造で内刳されていないが、新しくなると割矧造で作られる。作風は、初期のものが、ボリュームを残しながら衣文などをひだ状に彫り込むのに対して、新しくなるとつれて、平板なものとなり、衣文を線彫りに表すなど省略が目立ち、彫刻する意欲に欠けるとでも言うような現象が現れてくる。この彫刻の省略化という現象は、なにも櫛野寺像に限ったことではなく、甲西町正福寺の一連の十一面観音立像にも見受けられる点であり、県内の至る所の像に見られる。また、遠く島根県美保関町仏谷寺の聖観音立像群などにも見えるものであり、この省略化は、地方における仏像の平安後期彫刻化現象のひとつと考えられる。

湖東町善明寺には、2体の阿弥陀如来坐像が伝えられているが、そのうちの1体（像高133.2センチメートル）の像内に墨書があり、長承2年（1133）の制作と分かる。像は、極めて穏やかな表現をとり、当時の京都中央の作風によく倣っているが、墨書によれば、河内講師僧快

俊という仏師が、約50日間で制作したものである。

栗東町金胎寺には阿弥陀三尊像と持国天・増長天像の五体の像が伝えられているが、阿弥陀如来坐像と持国・増長天像の像内に墨書があり、康治1年（永治2・1142）の制作と分かる。いずれも、都風の定朝様をよく模した優作である。

善明寺や金胎寺に伝えられたこれら諸像は、像内に40名を前後する人名が記されており、仏像の制作に多くの人々が関係していることが分かるが、これは畿内近国の農村に、造像の風潮が高まってきたこと、そしてその負担に耐えられる人々が成長してきたことを物語っている。そして彼らは、可能な限り、京都中央の仏像と同じような作風の像を志向したのである。

総じて、この時期の彫刻はかなり繊細で優美なものが好まれたのであり、安土町石部神社の薬師如来坐像のように、細かな切金文様を施したものも制作された。しかし、近江八幡市福寿寺の千手観音立像が作られた嘉応2年（1170）頃になると、彫刻も変化しようとする。再びボリュームをとりもどしたその姿は、まさに、彫刻史における新時代の到来を予感させるものである。新時代とは、言うまでもなく、鎌倉時代である。

〔追記〕

県内には多数の平安後期彫刻が現存していますが、本稿では滋賀県立琵琶湖文化館で開催した「特別展 近江の名宝」の成果を中心にして述べました。同展に御協力を賜りました関係機関や寺社の皆様に深く感謝いたします。

（高梨純次氏提供）



薬師如来坐像
安土町 石部神社



千手観音立像
近江八幡市 福寿寺